# 初めて世界一周した日本人

加藤九祚

新潮選書

的条件によって、本人のおもわくとは別の方向に流されることがよくある。本書は今から200年前に石巻港を船出し、台風のために太平洋を漂流し、日本人としてはじめて世界一周をなしとげた仙台漁民の物語である。彼らは蘭学者大槻玄沢らにその体験を語り、名著『環海異聞』を残して世に伝えたが、私は、これまで知られた資料以外に、外国人の眼で見た彼らとこの周行の様子を知ることができる新資料を新たに発掘して、その旅の再構成を試みた。　著者

初めて世界一周した日本人〈新潮選書〉

一九九三年九月一〇日　発行

著者　加藤九祚

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号　一六二

電話　営業部（03）三二六六-五一一一
編集部（03）三二六六-五四一一

振替　東京四-八〇八番

印刷　株式会社光邦

製本　株式会社植木製本所

© Kyuzo Kato 1993, Printed in Japan

（乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）

ISBN4-10-600445-3　C0321

価格はカバーに表示してあります。

加藤九祚（かとうきゅうぞう）

1922年、朝鮮に生れる。上智大学文学部ドイツ文学科卒。北・中央アジア民族文化史専攻。国立民族学博物館名誉教授、創価大学教授。学術博士。ロシア科学アカデミー名誉歴史学博士。『天の蛇―ニコライ・ネフスキーの生涯』(河出書房新社）では大仏次郎賞を受賞。著書に『シベリアに憑かれた人々』(岩波新書）『北東アジア民族学史の研究』(恒文社）ほか多数。
住所・武蔵野市吉祥寺東町2-40-20

装幀：新潮社装幀室／印刷 錦明印刷

新潮選書

読書を楽しみ、
読書によって思索し、
真の美と詩心を究める
——この選書は、
時代の流れとともに

知識をひろめ、
芳醇な美酒をゆっくり
醸そうという
考え方にたった
珠玉の一冊一冊です。

**ウィーン物語**
宝木範義
カフェ、美術館、駅など様々な空間に都市の感性を探る新しい歴史物語。
定価900円

**三日月（クレセント）の世紀**
—「大航海時代」のトルコ、イラン、インド—
那谷敏郎
大航海時代に、より多く世界を動かしたトルコ、イラン、インドの興亡。
定価950円

**カリブ海の海賊たち**
クリントン・V・ブラック
増田義郎訳
勇猛果敢なカリブの海賊たちの宿命的な人生を描くロマン溢れる伝記。
定価1200円

**ヒトラーを生んだ国**
八田恭昌
進歩的なワイマール体制の中から、なぜヒトラーの悪夢は起ったのか。
定価1000円

**世界地図の中で考える**
高坂正堯
国際政治学者の視点で現代が直面する世界化時代の危機を訴える。
定価1200円

**タントラ 東洋の知恵**
A・ムケルジー
松長有慶訳
ヨーガ・セオリー《タントラ的思考》を図版入りで平易に解く入門書。
定価1080円

**草原の国 モンゴル**
D・マイダル
加藤九祚訳
波瀾に富んだ歴史、儀礼、芸術から博物館ガイドにいたるその全貌。
定価1100円

**スパイだったスパイ小説家たち**
A・マスターズ　永井淳訳
元情報部員だったスパイ小説家の実人生と作品との関わりあいを描く。
定価1100円

**江戸の風呂**
今野信雄
裸のけんか、混浴、のど自慢、はては温泉番付まで、風呂から見た江戸。
定価880円

**ユニークな美術館めぐり**
朝日新聞社編
ユニークな収集を誇る八十七館をその由来から特徴まで分り易く解説。
定価1250円

**チーズの話**
新沼杏二
チーズ食いの旅を続け、牧畜にささえられた人間の風土と文明を探る！
定価1300円

**ソバの科学**
長友大
「21世紀の食糧・ソバ」のあらゆる生態を探ったソバ学四十年の成果。
定価1010円

**ドン・キホーテの食卓**
荻内勝之
セルバンテスがひそかに仕掛けた茄子とタマネギと豚肉の秘密を解く。
定価720円

**海の秘宝物語**
三杉隆敏
海底から二七〇億円の宝物を引揚げた人々の話等一一の水中秘宝物語。
定価880円

**海辺の聖地**
——日本人と信仰空間——
上田篤
歌に詠われ神となるヤマや陸標を各地の海辺に検証する独自の空間論！
定価1000円

**十三世紀の西方見聞録**
那谷敏郎
マルコ・ポーロの時代フビライの国から西へと向う二人の僧がいた——。
定価1200円

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

**武器としてのことば**
——茶の間の国際情報学——
鈴木孝夫
日本は情報鎖国に陥っている——。解決策としての言語の戦略を語る。
定価1300円

**通じる英語**
Idioms for Business
C・マカードル
井上謙治編訳
慣用句(イディオム)を使い、一味違う英語をしゃべってみては……慣用句活用辞典。
定価1000円

**私の好きな長編小説**
加賀乙彦
ポピュラーな世界の傑作12編の魅力を、独特の切り口で捉え語り尽す。
定価1000円

**海辺の民俗学**
石井忠
椰子の実、生きた化石オウム貝、海漂器……。玄界灘の漂着物の物語。
定価950円

**インド聖地巡礼**
久保田展弘
ヒマラヤ山麓から大陸最南端の聖地まで歩きつつ宗教の根源を考える。
定価1100円

**中国名茶紀行**
布目潮渢
日本の茶のルーツ中国を旅しながら名茶の由来、風土、製法等を語る。
定価1100円

**パリ物語**
宝木範義
あらゆる都市空間に光をあて、パリの魅力の謎を探る新しい歴史物語。
定価900円

**暦と占いの科学**
永田久
暦と占いの生い立ちや仕組を科学的に面白く解き明かす〈数〉の教養案内。
定価950円

**要約 世界文学全集(I・II)**
木原武一
十五分間で読む名作古典六二編——原作の味そのままに愉しめる労作。
各定価1200円

# 初めて世界一周した日本人

加藤九祚

新潮選書

# はじめに

本書は今から二〇〇年前の一七九三（寛政五）年一一月、宮城県石巻港から船出した若宮丸の乗組員一六人の漂泊とその背景の物語である（本書にはフィクションはない）。そのうち一二人は死亡したりロシア（シベリア）に残留したりしたが、津太夫ら四人は一八〇四（文化元）年秋、ロシア初の世界周航船ナジェジダ号に乗せられて長崎に送還され、翌年夏故郷に帰りつくことができた。彼らは、結果的にみて、石巻から石巻まで、日本人としてはじめて世界を一周し、その見聞を日本につたえたのである。またシベリアに残ったキセリョフ善六らは日露両国の友好のためにその生涯を献げた。

津太夫らの一一年にわたる漂泊は、漂流からペテルブルグまでとナジェジダ号に乗船して帰国するまでの二部に分けることができよう。一部と二部を通した資料としては、当時の蘭学者大槻玄沢と志村弘強が仙台藩命によって津太夫らから直接話をきいてまとめた『環海異聞』がある。これは、津太夫らよりも一二年前にロシアから帰国した伊勢の大黒屋光太夫らと蘭学者桂川甫周の著になる『北槎聞略』とともに、江戸時代日本人の外国に関する直接的見聞記として名著に数えられている。これらの書物の写本が鎖国下の日本にあたえた影響ははかり知れないものがあると私は思う。津太夫らの漂泊の第二部については、『環海異聞』（およびその類書）のほかに、ナジ

エジダ号の船長クルゼンシュテルンの航海記やナジェジダ号に同乗した博物学者ラングスドルフの旅行記などがある。

私は今回、第二部について未公刊の重要な一資料を利用することができた。これは『環海異聞』巻一五に「レーヘンスタルレン」（二七歳）の名で「下案針役」として出ているレーヴェンシュテルン中尉の日記である。これはエストニア共和国の首都タリンの古文書館にドイツ語の原稿のまま保管されているが、私が実際に利用したのは、三〇年来の友人E・ルーボ＝レスニチェンコ博士（エルミタージュ博物館研究員）の夫人タマラさんによるロシア語訳の原稿である。これによって私は、津太夫ひとりをのぞく帰国日本人についてのクルゼンシュテルン船長の「悪評」にたいして、彼らを弁護することができた。またナジェジダ号での船上生活の細部についても、長崎での出来事についても、これまで以上に知ることができた。

津太夫らの漂泊の第一部についても、私なりに、手の届く限りの資料を利用して、いくらかは新しい知見を加えたつもりである。また彼らが八年、私たちが五年暮らしたシベリアでの生活について、多少の感情移入を試みたことも確かである。

『環海異聞』をめぐる資料や研究は多数にのぼり、私も本書の中でそれらをすべて利用したわけではない。ただ『環海異聞』（以下『異聞』という）は不朽であるし、いずれつぎの世代の人たちが、さらに研究を前進させることを期待しつつ、本書がその一里塚になれば幸いであると思う。また若宮丸乗組員たちによる日本人初の世界一周について、再評価の一助になることができれば本懐である。

著　者

初めて世界一周した日本人・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに　3
第一章　遭難から漂着まで……13
発端　13
北太平洋の島に漂着　14
上陸の島名について　17
アツカ（アトカ）島　19
第二章　ロシアのアレウト列島進出……23
先頭にたった「踏破者」たち　23
ベーリングの大探検　26
アンドレヤン・トルストウイフという人　30
シェリホフとデラロフ、バラノフ　32
アレウト族の生活　37
第三章　アレウト列島からシベリアへ……41
アツカ島からオホーツクへ　41

太平洋の門オホーツク　44
オホーツク街道　46
ヤクーツクとヤクート（族）　51
ヤクーツクからイルクーツクへ　56
イルクーツクの町　58
イルクーツクの歴史　59
イルクーツクを訪れた日本人たち　60
イルクーツクでの出来事　63
若宮丸一行の人間関係　67
バイカル湖とツングース、ブリヤート　71
ロシア人の風俗習慣　74
第四章　シベリアからペテルブルグへ……77
ロシアの首都へ　77
ルミャンツェフとクルゼンシュテルン　79
遣日使節レザノフ　83

ペテルブルグでの見聞と出来事　85
第五章　ロシアを後に……91
出　航　91
ラングスドルフの登場　93
コペンハーゲンからイギリスへ　95
ファルマスからテネリフェ島へ　97
テネリフェ島からサンタ・カタリナ島へ　101
サンタ・カタリナ島にて　106
第六章　大西洋からホーン岬まわり太平洋へ……113
マルケサス諸島までの船旅　113
クルゼンシュテルンの日本人評　116
ヌクヒヴァ島に着く　119
ヌクヒヴァ島にて　122
「売春交易」　123
レザノフとクルゼンシュテルンの争い　127

ハワイ島経由カムチャツカへ　132
第七章　カムチャツカから長崎へ……137
ペトロパウロフスク港にて　137
日本に向かう　143
第八章　長崎にて……145
長崎入港　145
ロシアとオランダ　146
長崎での応接とロシア皇帝の親書　148
レザノフの上陸願い　152
長崎における漂流民たち　154
幕府の対応　159
第九章　それぞれの後日……165
レザノフ　愛と死　165
ラングスドルフ　172

クルゼンシュテルンとリシャンスキー　173
キセリョフ善六　177
帰国後の日本人たち　182
あとがき　186
参考文献　189

# 初めて世界一周した日本人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com